

未だ各地の法人経理の担当事務員は、「外部では生活との連携部分を疑問重視する…と聞いてます」のところでびくびくしている傾向がみられます。

大丈夫です。村の中での請求書の仕分けやお金のやり取りはすべて、生活経理と法人経理の担当者間で現行の税法に基づいて適正に処理されているからです。そのやり取りを他の村人が知らなくとも、一体生活を満喫できる仕組みになっています。

鶏の餌として購入した米ぬかを、ちょっと拝借して食生活で漬け物のぬか床に活用することなど、よくあることです。そこに養鶏部から生活部に $15\text{ kg} \times 20\text{ 円} = 300\text{ 円}$ の請求書が切られ、目安の実質経営資料に反映される。そのことの行為の意図が不鮮明のまま、こんな些細なことの日々の積み重ねで村の空気が醸しだされていくと、どんな村になっていくだろうか？

確かに90年代初め、「一体の完全専門分業社会」顕現を目指して、生活と産業を徹底して各人の労働時間までももらさず分離してみたことがあります。一般では生活（暮らし）と産業（会社など）が最初から分離していますが、自分達の目指す社会は本来生活と産業が一つで構成されているから戸惑うことが多々ありました。いつしか専門分業の確立の方へ力が入り、我がところがまず成り立てばよい、他の部門（実顕地・人）はとりあえず関係ない、の意識や気持ちが増大されていきました。

肝心の「一体」が置き忘れさられたような感がありました。

これではいかんと、全国実顕地一つ、一つ財布からの実働に重点を移しつつ、全国各部研の充実や実顕地間交流、経営研やお母さん研や青年研が活発に始動し始めた昨今だとみています。

一つから見たら、実顕地はなんと実に老若男女多彩なメンバーで満ちあふれているのだろう！ とみえてくるから不思議です。